



令和5年「卯年」の絵馬

## 清水 第二二七号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・正月の濡れ手観音

一瞬一瞬も観音さまを離さない	清水寺貫主 森 清範	2
大西良慶和上法話「太子和讃講話」④		14
「助けて」という声に寄り添う	清水寺執事補 大西英玄	26
五明洞浄墨 趙樸初筆「良慶和上白寿祝寿詩」		31
今すでにある有り難さ	清水寺執事補 大西晶允	32
オンライン授与所開設 清水寺ゆかりの品頒布		37
『四十手深要決義』を読む 第24回	清水寺執事補 森 清顕	38
お砂踏み百観音 東京へ史上初の大結集		47
『成就院日記』翻刻・刊行にあたって③⑩	清水寺史編纂委員 川嶋將生	48
『清水寺成就院日記』第7巻が刊行		61
清水寺大事典 その十四		62
「清水寺・古写真館」 金銅製の狛犬などの末路		69
「清水寺で世界を語る」迎えて十回に		70
伝統文化を学ぶ寺小屋「育龍」が開校		73
二〇二二年「今年の漢字」二回目の「戦」		76
奉納十周年の篠笛を奏で北天の雄顕彰法要奉修		78
乳がない世界めざしピンクライトアップ		80
津軽音羽会が恒例の餅米三百キロ奉納		82
京都府が清水寺で婚活・縁結びの集い		84
内外往来		85

# 一瞬一瞬も観音さまを離さない

清水寺貫主

森

清  
義

新しい年を迎えました。皆さま、いかが正月をお過ごしでしたでしょうか。

今年<sup>うとし</sup>は卯年<sup>うさぎ</sup>です。兎<sup>うさぎ</sup>です。それで年賀状に「鳥飛<sup>うひ</sup>兎走<sup>とそう</sup>」と揮毫<sup>きごう</sup>いたしました。中国の古代神話では太陽<sup>からす</sup>に三本足の鳥<sup>からす</sup>がいるというので、鳥の字には太陽という意味があります。月に兎<sup>うさぎ</sup>が住んでいるという話は有名ですから、皆さまも先刻<sup>さきとき</sup>ご存じでしょう。それで「鳥飛兎走<sup>うひとそう</sup>」といえますのは、月日のたつのが速いことを言います。私<sup>わたし</sup>くらいの年になりますと、新しい年を迎える度に「本当に光陰矢<sup>ひかり</sup>の如<sup>ごと</sup>しやなあ」と思います。

相変わらず新型<sup>しんがた</sup>コロナウイルスが感染をを広げるところを繰り返しておりますが、流行<sup>はやり</sup>し始めてからもう三年<sup>さんねん</sup>になります。これまた速いものです。マスクをして手洗いと消毒<sup>しょうじく</sup>を励行<sup>りきぎやう</sup>し三密<sup>さんみつ</sup>を避けることが重要

です。年末年始<sup>ねんまつしげ</sup>に帰省<sup>ききョう</sup>して両親<sup>りやうしん</sup>や友達<sup>ともだち</sup>と会うのも、お年寄り<sup>おとしよ</sup>りにコロナ<sup>コロナ</sup>を移しはしないかと随分<sup>ずいぶん</sup>と気を遣<sup>つか</sup>います。あれこれ何かと不自由<sup>ふじゆう</sup>な生活<sup>せいかつ</sup>ですから、コロナ<sup>コロナ</sup>の三年間<sup>さんねんかん</sup>は「長いなあ」という感じがします。



法話する森貫主

## 「胸つぶるるもの」親の病氣

こんなことを思いながら、平安時代の清少納言はどんな風に世の中を感じていたのかと『枕草子』を調べてみました。えらいものですね。「清範さん、ここ読んで」と清少納言が出てきて知らせてくれました。それは『枕草子』の「胸つぶるるもの」という段です。心配や不安などで胸がドキドキする事柄という意味です。その段にこんなことが書いてあります。

「親などの心地あしとて、例ならぬけしきなる。まして、世の中などさわがしと聞ゆるころは、よろづの事おぼえず」

親が気分悪いとって、普段と違う病氣のように見えるときは、胸がドキドキするということです。まして流行病などが広まっていて世間が騒がしいときはもう何も頭に浮かんでこないと心配で心配でなりません。なるほどそうですね。ちょうど今時分の事柄とぴったり重なります。

このほかに「胸つぶるるもの」はどんなものがあるのかと見ますと、紙のこよりをよることが出てきます。近ごろはホッチキスで簡単に紙を綴じますが、少し前までは紙をそろえ、キリで穴を開けて、こよりを通し綴じていました。和紙のこよりは強いのですが、それでも切れないかとドキドキします。私の先輩は会社の入社試験の問題にこよりを作るのがあったと言っていました。



卯年の年賀状に書いた「烏飛兔走」

家に憎らしい人が来たときもドキドキすると書いています。夏目漱石の弟子で、有名な作家の内田百閒は客嫌いで知られていましたが、自宅の門柱に「世の中に人の来るこそうれしけれ、とはいうもののお前ではなし」という貼り紙をしていたそうです。これを読んだら、訪ねていきませんね。しかし、電話は線一本で相手の事情もお構いなしに家に入り込んできます。この頃は電話線ありません。どこにいてもピコピコピコと鳴って追いかけられます。

『枕草子』はそれから、赤ちゃんが乳も飲まず長く泣き続けることも「胸つぶるるもの」と出てきます。この前、新幹線に乗っていましたが、私の前の席と後ろの席で赤ちゃんがギャーギャー泣き出しました。なかなか泣き止みません。うるさいといえ、うるさいことですが、それよりもお母さん、お父さんはさぞかし「胸つぶるる」思いをしていたのではないのでしょうか。

## 重大な結果招く天気予報

ところで、新幹線や列車に乗ったときは、車窓か

ら水田の様子を眺めるのが好きです。いまはまだ冬田が広がっていて稲作の作業が始まっています。これが六月ごろは水田一面が青々とした稲になって、風が吹き渡り波打つ風景になって胸躍るさまになります。「青田風」「青田波」という季語があります。

「ああ、これが秋になったら、たわわに実る稲穂になるのだなあ」と見とれてしまいます。米は一粒万倍といえます。一粒の種<sup>たね</sup>が実ると千倍、万倍もの米になります。日本は瑞穂<sup>みずほ</sup>の国であり、稲作が国の基盤になっていましたから、どこの土地も米の石高で計っていました。米は大切でした。ですから、車窓から青田を見ますと、「順調に天候に恵まれてほしいなあ」と祈る思いになります。テレビで長期予報などが出てきたりしますと、つい真剣に見てしまいます。

最近の天気予報は実に正確です。長期予報もだいたい当たります。この前、朝の諸堂参りに出掛けようとしていましたら、警備員さんから「貫主さん、五分後に雨が降り出しますよ。この傘を持って行ってください」と声を掛けられました。「なんで、そ

んなことが分かるのや」「スマホで分かります」ということでした。歩き始めてしばらくしたら、確かに雨が降ってきました。

戦前、日本の陸軍は気象部という機関を特別に設置しました。航空隊や砲兵隊が攻撃するときには気象条件が極めて重大です。いろいろと科学的に観測し天候がどうなるか予報を立て戦闘開始の日時を決定するわけです。その気象部は東京都杉並区に設置されましたが、構内には気象神社が造設されたそうです。最後は「神さん、どうぞ当たりますように」と祈願したと書いてありました。神頼みだったのです。戦後、気象神社は同じ区内の氷川神社の境内に遷座して、現在も祭られているそうです。

皆さん、子どものころ、「明日、天気になあれ」と言ってお下駄を放り投げ占いませんでしたか。表を向けたら晴れ、裏を向けたら雨。こんないい加減なことでは天気予報は当たりませぬ。天気予報をないがしろにすると重大な結果を招くことがしばしばあります。この春には一年になりますが、昨年四月に北海道の知床半島沖で小型観光船が沈没する事故が

ありました。乗員乗客二十六人が亡くなったり行方不明になったりしました。当時、斜里町には強風注意報や波浪注意報が出ていましたが、それでも出航して高波にのまれたのです。

### 海に棲む魔物と心に棲む魔物

斜里町には毘沙門堂と観音堂と聖徳太子殿を祀っている知床三堂があります。作家の立松和平さんは知床の自然がすっかり気に入って、仕事場の山荘を置いていたのですが、心の拠りどころがほしいという地元の人たちと一緒にになって北方を守護する毘沙門天を祀るお堂を建立しました。さらに立松さんは法隆寺ともご縁がありましたから聖徳太子殿を建て、続いて観音堂も建てというように、たくさんの人たちの力を集めて手作りです。三堂を設けたのです。毎年六月に例大祭を開いていて、法隆寺の管長さんはもちろん行っておりますので、京都仏教会にも一緒に参りませんかというお誘いがあり、相国寺の有馬頼底猊下も参列しております。清水寺からは森孝忍部長が例年参っておりますが、昨年六月の例大祭では



斜里町の知床三堂例大祭で挨拶する有馬頼底猥下（右、平成30年6月24日）

堂前で観光船沈没事故の犠牲者供養を執り行い、海岸では海に供養の卒塔婆を流し犠牲者の冥福と行方不明者の一刻も早い発見、それから海上の安全を祈願したと言っておりました。

知床は日本の一番北にあって、オホーツク海に突き出た半島です。冬は北からの猛烈な寒風が吹いて流水が流れ着きます。北の海は厳しい自然の地です。だからといって南の海は安全かというと、そういうわけではありません。あなどってはいけません。

奈良時代、日本の留学生でありました阿倍仲麻呂は素晴らしい才能の持ち主でした。遣唐使とともに唐に渡って勉強し、玄宗皇帝に認められて仕えました。日本に帰りたいと願い出ても許されませんでした。ようやく許可が出て天宝十二年（七五三）に帰国の途に着くことになりました。その時、唐の詩人、王維が送別の詩を贈っています。その始まりに、  
積水 極む可からず 安くんぞ知らん蒼海の東  
と詠んでいます。「海の果てはきわめることはできないし、青海原の東も知りようもない」と言います。海は広大で未知の世界です。そして、